



メタデータ項目	社会経営ジャーナル第5号掲載論文
題名 Title	福島県只見町における編み組細工の変遷
作成者 Author	齋藤 貴之
雑誌名 Citation	社会経営ジャーナル, 2017, Vol.5, pp38-46
発行者 Publisher	放送大学社会経営研究編集委員会
ISSN	2188-1073
巻	Vol. 5
ページ	pp38-46
発行年	2017
URL	http://u-air.net/SGJ/pub/20171101J-Saito.pdf

5. 福島県只見町における編み組細工の変遷

齋藤 貴之

要旨

本稿は、福島県只見町において昔から行なわれ、いまなお製作されている編み組細工の変化と、その変化が何によってもたらされたかについて探究するものである。編み組細工は植物を使って編んだ工作物であり、一般的にこのような工作物が紹介される場合、伝統・伝承といった文脈の中で語られるが、その有り方は戦後の社会変化を境に大きく変化している。本稿では編み組細工の原初の姿である自給自足社会での在り方、戦後に起きた変化について説明し、現在に至るまでの変遷を示した上で、編み組細工で「変化したもの」と「変化しなかったもの」を明らかにしていく。

なお、「編み組細工」について本稿ではアケビつる・クルミ皮・ヒロロ・マタタビ・ブドウツルなどの植物で作られた細工と定義し、対象としたい。なお、只見町では、製作しているものを総称して「つる細工」と呼ぶことがあり、町のパンフレットでもこの呼称を採用している場合がある。

1. 只見町と只見町の編み組細工の現在の姿

只見町は、公式ホームページによると人口4308人（2017年4月1日時点）の町であり、「四方を緑の山々に囲まれ、福島県の西南にあり、西南部は新潟県に接して」いる。「面積の94%を占める豊かな森林資源に恵まれ、わが国屈指の豪雪地帯という厳しい自然環境から生まれる四季の美しい移り変わりが、緑と水の郷・只見の源となつて」いる(只見町, 2015a)。その豊かな自然環境のなか、戦前まで自

給自足社会を残していた。その中で冬期間には農業・漁撈・山樵・生活で使われる道具を自分たちで製作していた。製作されてきた道具のなかで、アケビ・クルミ・ヒロロ・マタタビ・ブドウツルなどの植物を原材料としたカゴやザルなどの編み組細工は現在でも製作されている。

また、「平成14年に国有林のブナ林の伐採反対運動を機に、河野昭一京都大学名誉教授をリーダーに「ブナ林学術調査事業」を実施し、只見町のブナ林の遺伝的多様性の高さ、生物多様性の豊かさが明らかにされ」(只見町, 2015a)た。これをきっかけに只見町は、ブナを中心とした自然環境をもとにした地域づくりを行う。その中で、ユネスコエコパーク登録にむけた活動を行い、平成26年6月に登録された。エコパークは、「人間社会と自然環境の共生を実践するモデル地域」(只見町, 2015a)である。町はエコパーク関連事業のひとつとして「地域の自然を生かした地域活性化、産業振興」を行っており、

『「自然首都・只見」伝承産品ブランド化支援補助事業』として、山菜加工品、たぐり飴などの伝統食、はちみつなどの中に、後述の明和民芸品保存会と、またたび屋のアケビつる細工・クルミ皮細工・ヒロロ細工、マタタビ細工が選定され、これらの細工品はパンフレットでは「自然とともに暮らしてきた只見の生活から生まれた伝統工芸品」「マタタビのつるからつくられる「マタタビ細工」は、雪の多い只見で継承される貴重な伝統工芸品です」として紹介されている。

現在の町内での編み組細工の実施状況を示すと、昭和40年代から50年代にかけて、只見町3地区（只見地区・朝日地区・明和地区）でそれぞれ編み組細工を行うサークルが発足した。加えて、2011年には新たなサークル「またたび屋」が発足し、合計4つの編み組細工を行うサークルが只見町内に存在している。民芸品保存会の発足当時

は、このような会に所属せずに編み組細工を行う人も多数いたが、現在、継続的に編み組細工を行う人は大抵、いずれかのサークルに所属している。サークルとしての活動は材料の採取、振興センターでの製作、伝承活動、只見町のイベント（只見町文化祭、公民館まつり、只見ふるさとの雪まつり）での販売・実演活動、会員の製作物の販売とりまとめなどである。

編み組細工の材料の採取は、それぞれのサークルで材料の採取に適切な時期に集合して行う。編み組細工の製作は、個人宅で行うほか、冬期間に週一回程度、各地区の振興センターに集まり製作を行っている。集団での製作活動においては、技術の教えあいをするほか、雑談の場にもなっている。ただ、集団で製作を行うものの、分業は行わず一人一人が完成までの作業を行う。

製作物の販売は、「只見ふるさとの雪まつり」や「只見町文化祭」のような町内の各種イベントのほか、只見町観光まちづくり協会や会津ただみ振興公社を介した町内施設（観光まちづくり協会売店、歳時記会館など）、もしくは町外の観光PR・物産販売イベントで行われている。なお、サークルとしてはインターネットによる販売を行っていない。数をたくさん作って販売することを第一の目的とせず、現在の体制での製作活動を行うことを重視している。

また、技術向上のための方法として、教えあいの他、外部から講師を招き指導を受けている。また、製作するものは、サークルで規定しているわけではなく、個々が作りたいものをつくり、注文を受けたもの以外に関しては、販売状況などを見ながら決めていくようだ。

また、前述のユネスコエコパーク「只見地域には、マタタビやアケビ、クルミなどの天然素材を使った伝統的なかご編みや木地師の流れをくむ木工が存在しますが、現在、その後継者が育っていないのが実

状です。こうした伝統工芸の後継者の育成を図るため、様々な教室や育成事業および天然素材の保全に取り組むものとします。」(只見町, 2015b)としている。

2. 自給自足社会でのありかた

現在まで存続している福島県只見町の編み組細工について、原初の形である自給自足社会ではどのような形で行なわれてきたかを示す。

この時代の只見町の生活は、「この山国・雪国に生きる人々の暮らしは、自然のサイクルとともにあった。山村とはいえ、もっぱら林業を生業として生計を立てる人の数はそう多くなく、しかも森林伐採・搬出・流送や炭焼きといった林業には時代による消長があり、それだけに依存して一生を送ることはむずかしい。そうした生業は一時的なものであって、住民のほとんどは伝統的な生活様式に依拠しつつ、山間農業を根幹としてそれらを複合的に営んだ。兼業こそ山村生活の基本である。自給経済の暮らしのもとでは、夏季には農耕と養蚕とをもっぱらとし、降雪期には屋内作業をして一年の衣・住生活や農耕・養蚕に備え、雪が落ち着く早春から山に出て燃料を確保し、初夏には山菜採取や狩猟をするというのが近世から近代にかけての生活様式である。」(只見町史編さん委員会, 1993,p.30)とあるように、複数の生業を持ちながら生活を行っていた。

この時代に生活や生産活動に必要な道具を購入するのは、「自分たちの生産していない・できない」場合であり、購入するものも「製品」ではなく、刃を使った農具や布など自分たちが製作できない部分のみを購入していた。

自家製作した道具を使って生産活動を行う生活は、昭和20年代頃まで続いたようである。「昭和前期までの生活様式は伝統的な山間農

村のそれであり、貨幣経済はかなりの進展をみていたが、衣・食・住の基本的な生活は自給自足を原則としていた。養蚕を大きくやったのは地主階級の農家であり、一般農家では狭小な農地を耕作し、穀物を焼畑栽培に依存しつつ山菜採取や山林労務というような農外生産に従事した。衣類は木綿糸こそ購入によらざるを得なかったが、絹布の場合は糸取りから、そして木綿・絹ともに機織り、裁縫まで自家生産を行った。(中略)燃料も春木切りを行って自給したのである」(只見町史編さん委員会, 1993, pp.867-8)

いろいろな生業を持つなかで、冬季間に家の中で行うのが、生産用具づくりであった。この生産用具づくりのなかに、編み組細工が含まれており、そのような環境の中、編み組細工が戦後まで存続していた。

このような只見町のありようは日本の農村全体の傾向と一致しており、「農村が都市に対して独自の生活・文化領域を構成してきたことの根本には、農村が農業を足場として、さまざまな家庭生産、副業・山林などの自然資源と結びついて自給的な生産、生活を営む領域が広く存在していたことがあった。この結果として、農村は資本の運動から相対的に隔絶されていたのであった。」(高橋, 1972, p.8)。

また、この時代における編み組細工の担い手は男性であり、「冬期間のうち、降雪機には男は屋外作業の雪掘りと屋内作業のワラ・つる細工に明け暮れる毎日であった。」(民俗編, p.32) 一方、女性は機織り、縫製が冬の仕事であった。

3. 戦後の編み組細工の衰退(1) : 戦後の社会変化

しかしながら、生活用具や生産道具も自分たちで作成していた在り方は戦後20年ほどで衰退し、編み組細工も衰退していく。その変化

について、その主たる原因を三つ挙げる。

まず一つ目の変化の要因として、農地改革によって商品経済がもたらされ、結果として機械化による効率化とそれによって生み出された余剰労働力が賃金労働に移行していったことが挙げられる。日本の農村で戦後に起こった様々な制度変化は自給自足社会を変化させた。

「農地改革によって、小作農民が自ら直接生産物を商品化する自作農になったため、商品経済は画期的に浸透していった」(高橋, 1972, pp.8-9)。そして農村の都市化がすすんでいくことでこの傾向が急速にすすむことになる。このような変化は只見町においても見られる。

只見町統計要覧(只見町, 2007)では、第1次兼業農家が、昭和40年から平成2年の25年間で1/10に激減している一方で、第2次、第3次産業の就労人口が増えていることが分かる。また、主要農業機械普及の動向では、昭和40年からの平成2年の25年間で農機具による機械化が劇的に進んだことを示している。

このように農業の機械化により農作業の効率化ができ、余剰労働力が発生した。しかし、その余剰労働力の先は、夏場は建設業の日雇い労働など、冬場は出稼ぎなど現金収入が得られるものであり、漁撈など、昔からあった生業が行なわれなくなった。また、労働力を他に使う必要ができた要因は、子孫の就学費用、消費財の購入だけではなく、農業の機械化による投資費用もその一端である。機械が資本によってもたらされることを考えると、資本の支配領域に只見町内も含まれてしまったといえる。

これらの変化により、元来人力で行うために作られた農耕用の民具が使われなくなった。また、生業が商品作物の栽培、賃金労働へと移行したことにより、自給自足の社会で行われていた漁撈・山樵・屋根

ふきなどのかつての生業が行われなくなった。このことも、その用途に対する民具が使われなくなっていったと考えられる。

4. 戦後の編み組細工の衰退(2)：生活改善運動と消費生活化

二つ目の要因として農村の消費生活化・都市生活化が挙げられる。

「まず、戦後の民主化の諸政策があげられる。すなわち、国家体制の変革、家族制度の崩壊により『家』からの開放、身分関係の破棄等が実現され、自由、平等の精神が生れた。そして、生活においても『身分相応の生活』をよしとしないで、人なみの生活、自分の見える世界の中で最高の人々の生活に憧れ、その生活水準まで自分の生活を高めたという望みをもつようになった。」(戎野, 1968)

このような中、日本の農村では生活改善運動が各地で実施された。自分の生活を高めたいという望みは、都市から供給される商品を購入するという形でも実現されていった。このことが結果的には「農村の自給自足経済は完全に破壊されて、商品経済に巻き込まれてしまった。これによって、農民は都市文化と直接接触し、生活水準の高度化・文化的化禍を求めることが身近かなことと感じられるようになった。さらに、教育・医療・娯楽等の形でも直接都市文化に接触することになり、農民の生活は完全に変革され、農民の都市文化への憧憬はますます強くなり、生活の都市化すなわち文化的な生活への志向が完全に農民の姿勢として定着した。」(戎野, 1968)。生活水準を上げる、生活文化を上げることは都市文化の流入、消費社会への移行へとつながり、編み組細工の衰退につながる一因となった。

5. 戦後の編み組細工の衰退(3)：化成品の普及

また、戦後には安価で大量生産される化成品の普及が大きな影響を与えた。プラスチック、ナイロンなどの化成品が戦後普及したこと

が、従来自家製作していた民具を衰退させる原因となった。化成品普及時期は、新聞記事において「プラスチック製品文化展」(『朝日新聞』1949.12.15朝刊)という記事の時点ではまだ普及途上であるが、後に「最近プラスチックはいろいろな日用品におびただしく使われるようになりました。」(『朝日新聞』1953.11.13朝刊)ということが既知の事実として扱われていることから、わずか5年の間に生活に浸透したということが推察できる。

只見町でも、プラスチックは、ざるや物入れなど、日常のあらゆる所で使われるようになり、以前は、編み組細工を使っていたものが多数プラスチックに置き換わり、「衣類は昭和25年ごろから既製品がでまわるように(只見町史編さん委員会, 1998, p.726)」なった。また、只見町公民館報1959年12月号には「・・・それにゲンベイがゴム長に、わらじが地下たびに雨具はビニロンに変わる世の中だ。もっと合理的に生活設計を変えて現金収入を殖やさければ農家経営は成立しなくなった(只見町公民館, 1987, p.155)」とあり、この頃にはすでに衣類が化成品に置き換わっていること、ゲンベイなどの民具が化成品によって置き換わっていることを示している。

また、生活改善運動の一記事として、「又、台所に不潔感を与えている最も大きいものは湿気を吸った木材のじめじめした感じで・・・(中略)・・・すぐ十分に乾燥させるのに不都合が多ければプラスチックやビニール製品と徐々に切りかえていくのも一つの方法で、板壁などの水のかかりやすい場所には、女ででもかんたんに張れるビニールタイルを張ると、見違えるほど清潔になり、また淡色のビニールタイルを使えば明るくなります(只見町公民館, 1987, p.150)」とあり、只見町内でも、新素材の化成品が生活改善の手段として使われている事を示している。

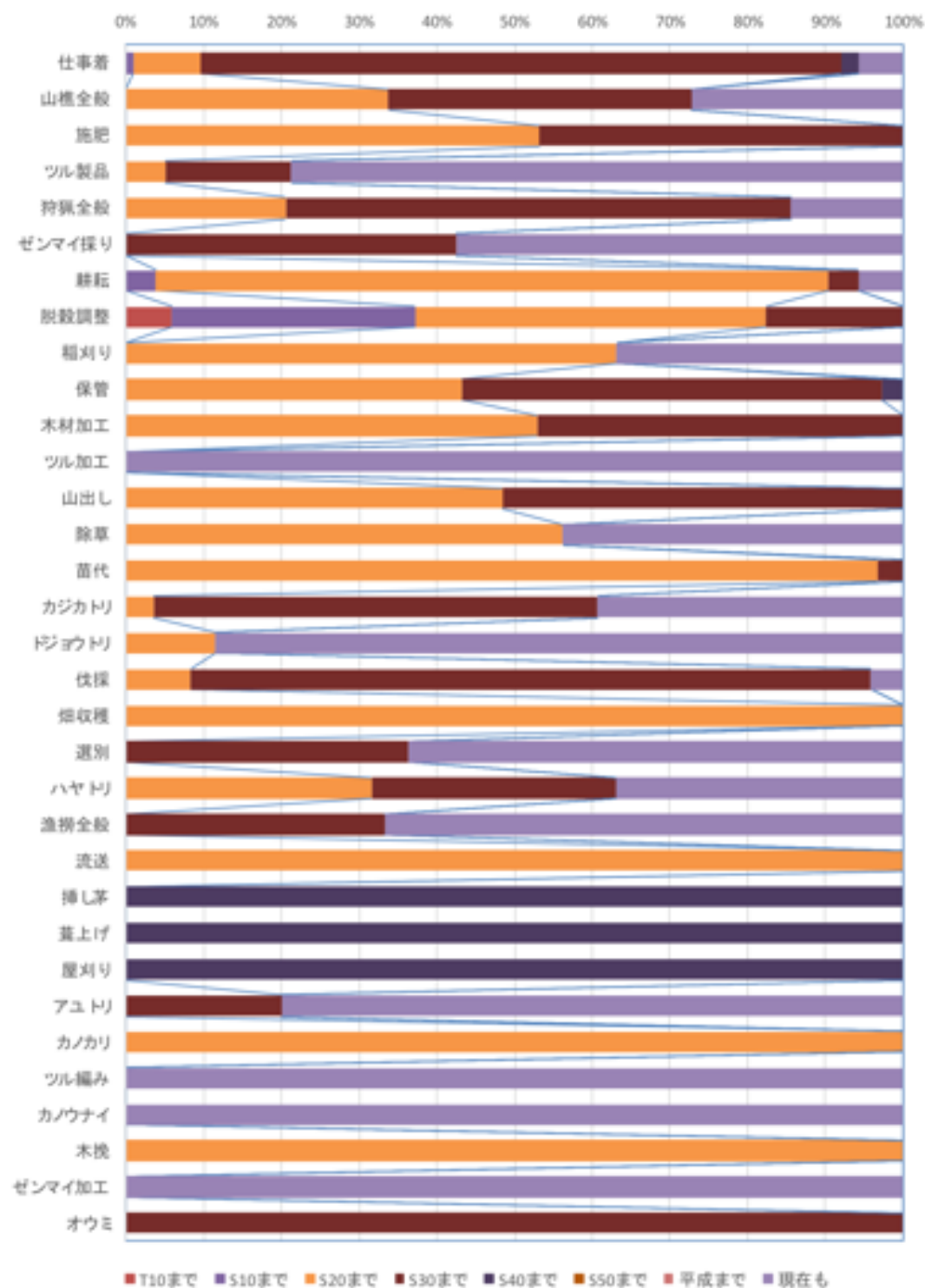


図1 自家製民具の用途と作られなくなった時代

6. 民具の衰退結果

これら戦後の変化によって自給自足社会で製作・使用していた民具がどう衰退したかを示す。編み組細工の存続の要件が失われる場合を裏付けるために、只見町の民具資料から、いつ頃から、どのような目的のものが無くなったのかを、只見町インターネット・エコミュージアムから取得した「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の国指定民具カードをもとに行った。分析したものからここでは、「図1自家製民具の用途と作られなくなった時代では、用途別に作られなくなった時代」を取り上げる。この図では「狩猟」「山樵」といった、生業としての活動が、昭和30年代に行われなくなったのと同じくしてその用途のものが製作されなくなり、また、農業生産に関わる民具に関しても、前述した機械化により従来の手動の農耕具から動力機つきの農耕具に変わっていき、衰退していったということが分かる。

7. 編み組細工の工芸産業としての見直し

先にあげた戦後約20年間に起きた変化により、「自給自足社会」は崩壊し、自家消費による編み組細工の存続は危機的な状況を迎えた。

一方で戦後、「民芸ブーム」が社会現象として発生し、自給自足社会の中で作られていた民具は民芸品という工芸の枠で存続するための動きが昭和30年代後半にでてきた。

民芸ブームとはどのようなものだったのだろうか。「とにかく、大変な民芸ブームである、観光地には、いわゆる民芸店と呼ばれる土産物店が居並び、大都市のどのような裏町にも、全国の民芸品をうず高く積みあげた民芸店が開かれている。・・・(中略)・・・そうかと思うと民芸喫茶店、民芸レストラン、民芸バー、民芸居酒屋があり民

芸医院や民芸美容院までがあって、民芸はいわば客寄せのうたい文句にも使われている(“「民芸」ブームの表裏,” 1976)」といった社会現象だったようだ。ただ、このブームは対象としている物こそ同じではあるが、柳宗悦の提唱した民藝理論とは、概念を異にしたものにとられるべきであり、「1950年代後半から1970年代にかけて民芸ブーム」という社会現象が起こった。・・・民芸ブームは、高度経済成長を背景として高まった農村部へのノスタルジアを受けて生じた、地方文化消費の動きの一つとしてとらえることができる。・・・ふるさと消費の一つのオプションとして位置付けることができる。そしてそれは

『場所』とは異なり『民芸品』という可動性を持ったモノであったために、容易に日常生活にもちこむことのできるふるさととして消費されることとなった(濱田, 2000)」、このように民芸ブームは、前述の消費生活化社会における、ふるさと消費の対象として、かつて自家製作された只見の民具を民芸品として消費する前提を作ったと考えられる。

このような流れを受け、昭和30年代後半から只見町では、従来の自家製作の民具を民芸品としてとらえ、産業化していく試みが見られる。

館報1962年2月号の案内「郷土民芸品展示会のお知らせ」では「日本古来の地方色豊かな民芸品が最近珍重されております。当地方にもすぐれた民芸品がたく山あったのですが、文化が進むにつれ、実用品としての値うちがなくなり、次第にその姿を消して参りました。しかし今日ではこれら伝統ある民芸品のよさが再認識され、広く紹介されております。我が只見町に於いてもこの機会に古くから統治につたわる民芸品の展示会を開き、地方産業としてとり入れられるよう、研究の場を持ちたいと考えます。・・・(只見町公民館,

1987,pp.687-688)」とあり、この時点では、只見町で作っていたものを「民芸品」の文脈で再活用し、産業化する試みがあったことが分かる。

なかでも、館報1964年10月号の「民芸品“マタタビ細工”の育成をー冬季家内工業としても最適(只見町公民館, 1987,pp1277-1278)」という、只見町役場経済課と只見町商工会の連名となっている記事は、採算性や効率的な生産について検討しており、産業としての期待の大きさがわかる。しかし、この試みについての続報を見つけることはできなかったため、実現には至らなかったようだ。

その後、編み組細工の工芸化に関する大きな動きはみられなかったが、昭和40年代なかばから各地区での民芸品保存会の設立の動きが見られた。只見民芸品保存会(現:明和民芸品保存会)の発足当時について、当時、明和公民館で事務局を行っていた刈屋晃吉さんに話を伺った。この当時は一家の長が出稼ぎに出る世帯が多く、冬場の地域自治(たとえば防火体制など)に問題が発生するようになった。出稼ぎ世帯解消のため、只見町に居ながらにして所得増加を目指した「農業所得100万円を考える会」を明和公民館でたちあげた。この頃の100万円というのは、「家族を出稼ぎ無しで養え、子供の教育もできる」金額だったそうだ。このため、反収をあげることや、(毛皮のチンチラなどの)新たな換金作物の開発など色々な部会をつくり指導者を呼んだりした。このような活動の中で、従来のものづくりを「民芸品」として販売しよう。ということになり、「只見民芸品保存会」が立ち上がったとのことだった。

これに前後して、朝日地区、只見地区でも「民芸品保存会」が立ち上がり、町内で「つる細工」を保存する体制ができた。なお、只見町

3地区の民芸品保存会での販売方式はこの当時に採用した方法を踏襲したと考えることができる。

そして、民芸品の製作はその時代の生産活動の主な担い手から引退した老人が、若い頃に作った経験がある「つる細工」を作り、観光客への土産物として売ることによって多少なりとも現金収入を得ることが期待された。

また、只見町固有の背景として、只見線の全線開業(1971年8月)、毎年2月に行われる只見町の冬の一大イベント「ふるさとの雪まつり」が1973年に開始されたこと、また、只見町と新潟県をつなぐ国道252号線(六十里越)の開通(1973年9月)など、只見町の現在でも主要な観光資源がこの時期に集中して完成ないしは開始されている。観光産業への期待と、そのなかで土産物品としての編み組細工の需要が期待できた。ということも民芸品保存会設立の背景としてあるだろう。

なお、民芸品保存会が立ち上がった当初、製作されていたものは、「民芸ブーム」で求められていた、ザル、ミノ、カゴ、ワラジ、ゲンベイなど以前に作られていた民具を当時のまま作る、もしくは当時の民具のミニチュアであった。

8. 福島県三島町の生活工芸運動の影響

前述のようにして、昭和40年台後半から民芸品保存会による只見町の編み組細工への取り組みは始まった。当初「民芸ブーム」による需要が主だったが、現在の在り方は近隣町村である三島町の生活工芸運動によってもたらせた面が大きい。

三島町は、只見町と同様に編組細工を昔から製作していた。三島町と只見町で編み組細工に対する取り組みが大きく変わったのは、1981年

の生活工芸運動開始からである。三島町の生活工芸運動は、「千葉大学工学部教授の宮崎清氏らが、三島町の工芸品調査にきていた。そこで、日頃より地域資源を生かした町づくりを目指した佐藤町長との話し合いの中で、町内に古くから受け継がれている、農作業用具や生活用具などの『ものづくり』に注目し、これを地場産業として育成し地域振興にいか」(伝統的工芸品産業振興協会, 2004,p.6)す目的で始まった。

以降、三島町生活工芸憲章制定(1981)、生活工芸研究所設立(1981)、三島町生活工芸展開催(1981)、生活工芸館完成(1986)と、町が主導した生活工芸運動が行われる。

生活工芸館の役割は、「ものづくり体験、製品デザインの開発や、生活工芸品の製作者である工人の指導育成、生活工芸品の品質管理などが大きな柱となって」(伝統的工芸品産業振興協会, 2004,p.8)いる。また、製品デザインも行っており、「山仕事や野良に出かけるときに腰につけていた袋をもとにボタンとしてこの地で食用として古くから用いられた栃のみを使用し、補強を必要な部分にモワダを組み込んだショルダーバッグ、手提げ籠、セカンドバッグ」(増島・西牧・宮崎, 1988)は、生活工芸館で試行錯誤して作られたものであり、現在もこのデザインによるものが多く製作されている。

このように、三島町は町が主導して生活工芸運動を行い、従来からの編み組細工の品質向上、消費者に受け入れられるデザインの開発、情報発信拠点の設立などの施策を行う等、工芸化を図り、成功した。また、1986年から始まる工人まつりは、人口1600人余りの町に2日間で入場者は2万人を超えるイベントとなり、編み組細工の工芸化に成功し、町おこしになった。また、2003年には「奥会津編み組細工」として伝統的工芸品に指定されている。

只見町の受けた影響はあるか。直接的な影響として、製作面、販売面がある。「工人まつり」や「全国編み組工芸品展」に参加する。三島町ではブドウツル細工を除き、「冬のものづくり教室」では町外からも参加者を募り、その技術を伝授しており、只見町内からの参加者もある。

三島町における取り組みは2000年前後から始まる生活工芸の流れともあいまって、多くの人に支持されることになった。只見町で製作するものも、今日的な生活でも利用できるようなものへと変わっていき、かごバッグなどといった装飾・服飾的用途のものが新たに製作されることとなった。

9. まとめ：「変化したもの」と「変化しなかったもの」

まとめとして、編み組細工の原初の姿と現状を比較して、どのように変わったか、また変わらなかったのか指摘したい。変化したものについては、五つ列挙する。列挙は個別に行っているが、それぞれの変化の要素は相互に作用していると考えている。また、同時に変わらなかったものについても言及している。

一つ目は、現在は、編み組細工を使わない選択ができるようになった点である。大量生産された製品として流通しているもので代替が可能になったため、自分で作る必要がなくなった。また、現在の生活で不要なものもある。例えば背負かごなどは、自動車などの普及により、もしくは山仕事自体が少なくなったこともあり、使う必要がなくなった。

二つ目は、現在は、編み組細工は趣味として作るようになった点である。また、作り手の中心が男性から女性に変化した。上記の趣味と

も関連するが、これはクラフト系ホビーは女性が多い(ホビー白書, 2014,p.49)こととの相関が表れていると考える。

三つ目は、現在は、製作するものが、(マタタビザルなどを除き)実用的なものから、趣味、嗜好的なものに変わったことである。この点は、二つ目に示した趣味になったことにも関連してくることである。

四つ目は、現在は、編み組細工の外部へのマーケットができた点である。以前は自家消費されていた編み組細工は、民芸品ブームにより、民芸品としての価値が出てきたことが認識された。さらに三島町の生活工芸運動により、それが深く浸透し、素材、品質、大きさである程度の相場ができた点も注目したい。

五つ目は、現在は、編み組細工が只見町の無形文化という認識ができた点である。ユネスコエコパークにおける「自然環境および生物多様性と人間との調和と共生を図る」文脈から「つる細工」は存続すべき価値のあるもの、受け継がれるべきものだという認識がされるようになった。

別の見方でこれらの変化をみると、編み組細工は「必然の存在から、選択された存在へ変化」したといえる。自給自足社会においては、生きるために編み組細工が必要であったが、消費社会となった現在では、あえて、編み組細工のもつ良さによって、作り手は自分の意思により残り、大量生産品がある中、消費者に選ばれている現在の状況といえる。

最後に、変わらなかったものをあげておきたい。ここまで検討された結果から、只見町の編み組細工において、原初の形から変化しなかったことは「地元の人が・地元で採取された材料を使って・地元で作る」ことである。

この三点を重要視することは、「只見生まれ、只見育ち、只見発」の付加価値の高い商品に只見町ブランド「只者じゃない」を認定していく活動や、蔵人自らが作った只見町の米で、只見町で製造した米焼酎「ねっか」などの現在の只見の活動にも相似点を観ることが出来る。このように、現在の只見町は、「地元の人が・地元で採取された材料を使って・地元で作る」ことが消費者に選択されるものづくりになるという認識が受け入れられていると考える。

今後も時代の変化により編組細工の在り方も変化していくだろうと考える。その変遷を今後も確認していきたい。

引用文献

1. 「『民芸』ブームの表裏」.(1976). 『芸術新潮』, 27(3), p.21-26.
2. 『ホビー白書』.(2014). 日本ホビー協会.
3. 高橋明善.(1972). 「都市化で衰退した農村の独自性(農村の生活はどう変わったか(特集))」. 『農林統計調査』, 22(9), pp.8-13.
4. 戎野真夫.(1968). 「農村における生活と農業〔秋田県〕」. 『国民経済』, 7(112), pp.46-69.
5. 増島郁夫, 西牧研治, 宮崎清.(1988). 「ヒロロを用いたバッグ: 軟質植物繊維の活用に関する一提案(日本デザイン学会第35回研究発表大会作品・設計)」. 『デザイン学研究』, (69), p.51.
6. 只見町.(2007). 『平成十九年度 只見町統計要覧』.
7. 只見町.(2015a). 『2014 只見町勢要覧』.
8. 只見町.(2015b). 『第1期(2015-2024年) 只見ユネスコエコパーク推進のための行動計画 福島県只見町』.
9. 只見町公民館.(1987). 『館報只見1』.
10. 只見町史編さん委員会.(1993). 『只見町史 第3巻(民俗編)』. 只

見町.

11. 只見町史編さん委員会.(1998). 『只見町史 第2巻(通史編2)』. 只見町.
12. 伝統的工芸品産業振興協会財団法人.(2004). 『平成15年度 伝統的工芸品産地調査・診断事業報告書 -奥会津編み組細工-』.
13. 濱田琢司.(2000, December 10). 「民芸ブームの一側面: 都市で消費された地方文化」. 『人文論究』.

参考文献

1. 萩原健太郎, 久野恵一,(2013), 『かごとざる』グラフィック社.
2. 鞍田崇,(2015), 『民藝のインテスマシー: 「いとおしき」をデザインする』明治大学出版会.
3. 鞍田崇, フィルムアート社編集部,(2012), 『「民藝」のレッスン: つたなさの技法』フィルムアート社.
4. 佐々木長生,(2015), 「'04 会津・只見の民具', 国際常民文化研究叢書9 -民具の名称に関する基礎的研究- [地域呼称一覧編]」神奈川大学 国際常民文化研究機構, 9, pp. 18-74.
5. 三谷竜二, 新潮社 編,(2014), 『「生活工芸」の時代』新潮社.
6. 三橋俊雄, 宮崎清, 松林健一,(1996), 「ものづくりを通じた自然と人間の共生に関する行動と概念: 福島県三島町の自然に働きかけるものづくりの実態調査を通して」, 『デザイン学研究』日本デザイン学会, 42(5), pp. 71-80.
7. 水尾比呂志,(1968), 『現代民芸論: 手仕事のゆくえ』新潮社.